

# 教育実習の 報告

## 教員人生の原点

矢野 悠斗

(別府大学・科目等履修生)

5月24日から6月11日の約3週間、私は母校の中学校で教育実習を行いました。そこで教育実習を通して学んだことを要点を絞りながら、振り返っていくと同時に、後述する私の教育実習での体験談が、少しでもこれから教育実習に行く学生の参考となれば幸いです。

3週間の短い期間で学んだことの1つ目は、「学び続ける姿勢」です。教育は、社会の変化に合わせて常に変わり続ける流行を占めるものが多く、私の実習校でも、既に各教室には学習用テレビが完備されていたり、生徒一人ひとりの学習用端末が厳重に管理されていました。それに伴い、教師が行う日々の授業の形態は、私が生徒として在籍していた数年前とは全く違うものとなっています。そんな中でも、日々の授業が成り立っていたのは、教師がそれらの変化に柔軟に対応していたからです。私も授業を作り、行う際は、試行錯誤の連続でしたが、これらのICT機器は授業を活性化させる“文房具”でなければならぬ事を実際の教育現場で体験できたのは貴重な事だったと思います。さらに、多くの中学生が携帯電話を持ち、当たり前のようにSNSを扱う時代なので、生徒指導の面でも教師が気を付けておかなければならない事は山積しています。私の実習校においても、教師の間でSNSに対する正しい知識と使い方について常に情報交換が行われていました。このように、教育現場では、常に学び続け、新たな事を実践しようとする姿勢が大切です。いくら実習生とはいえ、生徒にとっては、実習生も一人の教師として映るので、自覚と責任を持った言動を心がけた

いものです。一人の教師としてだけではなく、一人の人間として学んでいく姿勢は極めて重要です。身の回りの物、環境、人々、とりわけ、子どもたちから多くの事を吸収して、一人の人間として学んでいき、成長を楽しむ気持ちをこれからも大事にしていきたいと思います。

また、学んだことの2つ目は、「人は失敗するものである」ということです。これは実習校の指導主事から頂いた言葉です。生徒との関わり、コミュニケーション等の生徒指導の面でも多くの悔しい経験をしました。どこかで学生気分の自分がいたのか、生徒に“友達感覚”で接していたため、何気ない一言で生徒の心を傷つけたかもしれない事があったのです。その時に、指導主事の先生が指摘をしてくださり、生徒との距離感、及び、立場を勘違いしていないかと考える良い機会となったことを鮮明に覚えています。一人の教師として、猛省し、情けない気持ちになっていた時に、指導主事の先生から、「人間は失敗するものです。そこから何を学ぶかを大切にしてください。また、学校現場はいろいろな方々によって支えられおり、先生もその一片です。一つ一つの失敗に向き合って、生徒と学校を支えられる存在になりたいですね！」というメッセージを頂きました。教師が日々、人間的な成長するための“自分の答え”を、時に自問自答し、悩み、相談しながらも、見つけていく事をこれからも大切にしていきたいと思います。そのように成長していこうとする教師の姿勢は、必ず子どもの目に移り、子どもの人としての考え方、行動、いわゆる成長に繋がっていきます。私自身、このような経験があったからこそ、指導主事の方に教えられ、それが教師としての、また、一人の人間としての“学び”に繋がりました。失敗することを恐れず、受け入れて、認めること。そして、その失敗に対して、後に感謝できるように、日々向き合い、成長していくための考え方、行動をしていけるよう精進していきたいです。

教育実習を終えて、3週間を振り返った時、子どもたちと関わり合い、一緒に成長する日々は、一生、心に残される宝物となるでしょう。子どもの成長だ

けでなく、教師と子どもがお互いに成長していくことは、言葉には言い表せない喜びがあるのです。それが教師の魅力の一つであり、それこそがAIなどには到底できない、人間の美しさであると思っています。

これから教育実習を控える学生さんの中にも、教師という職業に対して様々な思いがあると思います。はっきりと教師になりたい気持ちや理由が明確な方もいれば、漠然としていてははっきりとはまだ分からないという方々もいると思います。どちらの場合でも、教育実習を体験する中で、自分なりの答えを出せるように、簡単な事一つでもいいので、課題意識を持ってほしいと思います。教師という職業に対しての情熱やエネルギーがある限り、必ず自分と、そして子どもたちと向き合っていく事ができます。一生に一度である教育実習を楽しみつつも、教師としての自覚と責任をもって、一瞬一瞬を大切にしていってほしいと思います。皆様のご健闘を祈っています。

---

## 最後まで信じ抜くことの大切さ

鳥越 大輝

(国際言語・文化学科4年)

---

「うち、バカで抜けてるところがあるから——」

これは、教育実習初日、1人の生徒が私に何気なく放った言葉である。

母校が統廃合でなくなったため、母校ではない中学校で5月31日から6月18日の3週間、教育実習を行い、国語科14回、道徳科4回の計18回の授業を実践した。教育実習を通して、子どもたちの良いところや努力を認め、最後まで子どもたちを信じ抜くことの大切さを学ぶことができた。ここでは、国語科の授業実践について述べたい。

教育実習当初は、子どもたちが得意な学習内容を展開する授業を検討していた。だが、子どもたちとともに私も成長したいと思い、子どもたちが苦手意識をもつ学習内容に挑戦することにした。そのた

め、私はいかに授業を華やかにするか、面白い教材にするかなどばかりに固執していた。確かに、授業の導入は子どもたちのやる気を引き出すような工夫が必要である。だが、授業の中心となる展開に入っていくにつれ、子どもたちの学習意欲は目に見えて低下していった。私の考える「楽しい授業」とは、表面的な楽しさでしかなかったのだ。

教科指導の先生に相談すると、「子どもたちのワークシートにコメントをつけて、参考になるものは名前を挙げて、クラス全体で紹介してみるようにしたらどうか」という助言を頂いた。そのため、毎時のワークシートや作文などにコメントをつけることにした。国語科の授業は2学級で行ったので、授業が終わる度に70人ほどのプリントを点検しなければならなかった。かなり大きな負担となるが、実際の授業では5分程度にしかならない。だが、手を抜かず、時に教科指導の先生と手分けをしながら、毎時でフィードバックをするようにした。また、机間支援についても、これまでは子どもたちの誤りを指摘することばかりにとどまっていたが、前時よりもできているところを見つけ、認めるような声かけも積極的にするようにした。

すると、クラス全体の学習に対する姿勢に少しずつ変化がみられるようになった。「バカで抜けてるところがある」と言っていた生徒もその1人である。第4回目の授業において、その生徒は誤字などがあったが、要点をおさえてまとめることができていた。そこで、次時にその生徒のワークシートをPPTでクラス全体に紹介した。すると、自然に拍手が起こった。その生徒は少し恥ずかしがっていたが、とても嬉しそうな様子が伝わってきた。その後の授業中は、隣の席の友だちに自ら教える姿もみられ、その日の日記に「書き方がわかると、国語の授業が前より少し楽しくなった」と記していた。

子どもたちにとって「楽しい授業」をつくるために大切なのは、授業者がいかに子どもたちの積み重ねてきた努力を見出し、その成長を認めることができるかにあったのだ。認められた生徒は、自己存在感を満たして自信をつけるとともに、「もっと頑

張りたい」というやる気高めることができる。また、周りの生徒も「私も頑張りたい」というやる気を出すようになる。このようにして、授業の中で子どもたちが互いを認めて高め合う雰囲気生まれ、「授業が楽しい」と感じるようになるのである。

母校ではない中学校で教育実習を行ったため、教育実習当初は教室の場所さえわからなかった。そのような段階から始まった教育実習だったが、子どもたちと先生方のおかげで、多くの気づきや学びを得ることができた。3週間過ごした教育実習校は、私にとって「第2の母校」となった。

結びに、卒業を間近に控え、誰に「ありがとう」を伝えたいか考えてみた。家族や、先生方、友だち、先輩、後輩、お世話になった人——。何かを受け取る度に「ありがとう」と言い、感謝する度に成長することができた4年間だった。思い出せるたくさんの「ありがとう」が私にとって成長の証になったと思う。今、「教職への道」を読んでいる後輩の皆さんも、自分が歩む道が本当に正しいのか、少なからず不安や悩みを抱えながら、教職課程を履修しているのだと思う。私も何度も心が折れそうになった。しかし、成功の反対は失敗ではなく、何もしないことだ。遠回りも近道もない。とにかくまずは右足を出して、次に左足を出してみたい。それを続けていけば前へと進むことができる。もし悩んで立ち止まってしまったら、誰かに相談してみよう。何とかかなる。何とかならなくても、それはそれで何とかなって、最後にはきつとうまくいく。だから皆さんはこうして、同じ「教職への道」を歩んでいるのだから。人を大切に、人から大切にされ、大切な人に囲まれた大学生活を過ごしてほしい。いつか同じ学校で会おう。

---

## ゴールではない。 通過点であり、成長の場

藤塚 大翔

(史学・文化財学科4年)

---

### はじめに

私は母校の中学校で、第2学年の社会科担当として6月21日から7月9日の3週間、教育実習を行いました。

教員採用試験は高校日本の枠で受験しました。そして、教員採用試験の日程は実習終了2日後の7月11日でした。みなさんは、この日程についてどのように考えますか。実習後、試験までしばらく期間が空いてしまう人、試験の後に実習がある人、中には実習中に試験がある人もいるかもしれません。まずは教育実習中の試験勉強や試験に向けての心の持ち方を述べたいと思います。

### 教育実習と採用試験

結論から述べると、実習中に机についてする試験勉強は基本的に不可能だと思って欲しいです。実習中は教材研究・授業準備や1日の整理・振り返りで忙しく、終わりがありません。しかし、同時に試験勉強のチャンスでもあります。忙しい中では頭がフル回転しています。教育実習までに勉強して貯め込んだ知識や考えてきた授業構成・指導観を教育実習で表現してみてください。そうすれば、受験勉強における過去問演習のように、最適なアウトプットの場となります。しかも、指導教員や様々な先生方のアドバイス付きです。つまり、実習と試験勉強を分けて考えないでください。実習は試験勉強の延長線、実践の場で、成長の場と捉えて欲しいです。

しかし、実習を経ることで、教員採用に向けて迷いが生じる場合もあるかもしれません。私も、後述する内容に関係がありますが、実習での楽しさ・学びによって、本当に高校教師の道で良いのか、考えさせられました。私は実習から試験までの期間が短かったため、悩む期間も少なく済みましたが、実

習から試験まで長く期間が空いてしまえば、それだけ深く考えてしまうかもしれません。ですが、それは実習での経験を自分自身に落とし込んでいる証拠であり、重要かつ良いことだと思います。悩みながらも自信をもって、少しずつ進んで欲しいです。

## 実習の内容

私は授業を、社会科で5回、道徳で1回行いました。私の場合、期末テスト期間が被っていたこともあり、指導案の作成、授業観察に重きを置こうとの指導教員の判断で、授業実践数は少なめでした。授業観察は担当である社会科だけでなく、様々な教科を観察しました。同じ先生でも、クラスによる授業の実践方法、雰囲気作りが異なっていたり、同じクラスでも教科によってみせる表情が異なっていたり、同じ分野の授業でも先生による特徴・工夫をみることができ、大変有意義なものでした。実習校では、生徒一人一人にタブレットが配備されており、授業で活用している教科が多かったです。社会科では、タブレットを使用することはありませんでしたが、パワーポイントを使用した授業が主体でした。また、大きな特徴として、「単元を貫く学習課題」が設定されており、単元ごとに設定した学習課題に合わせて、1時間毎の学習課題・まとめを設定していました。

担当クラス内では、給食指導や朝の会・帰りの会の指導等も行うことができました。給食時はコロナの影響により、班になることはできず、前を向いて無言で給食を食べました。朝の会・帰りの会では、健康観察や1日を振り返ってのコメントを述べました。1日を振り返る際に、最初は慣れず、一方的に話してしまう事が多かったのですが、2週目、3週目では生徒との会話を楽しむことができました。楽しむためには、昼休みや10分休憩での生徒との交流や、授業や清掃時の様子を通して生徒の良さを発見することが重要でした。また、帰りの会の際に、担当の先生が生徒指導により、長時間戻れないという場面もありました。隣のクラスの先生に相談し、手伝ってもらいながら帰りの会を終えました。臨機応

変に対応することが重要ですが、その際には、生徒が1番であるため、必ず先生に相談し、頼ることが重要だと感じました。

## 生徒は子どもだけど、子どもじゃない

最後に伝えたいのは、私が実習で最も勉強になったことです。中学生は無邪気で、失敗も多い、かわい子子どもたちですが、授業において、自分自身の考え・思いを持っています。「はい」か「いいえ」という2択の間を出しても、理由と共に「どちらでもない」という意見を持つ生徒もいます。特にその傾向を強く見ることができたのは道徳の授業です。その一人一人の貴重な考え・思いをうまく引き出してあげる先生方の工夫、それによって生徒が楽しそうに話し合っている教室の雰囲気は忘れることができません。議論を交わす場では、生徒を子どもとして下に見るのではなく、生徒を尊重して、1人の対等な人間として接してあげてください。

## おわりに

実習前はとても不安な気持ちになると思います。しかし、これまでの3年間で教職科目等を受講して、ここまで進んできた皆さんなら大丈夫です。自信を持ってください。成長の場として、教育実習が有意義なものになることを願っています。

---

## 教師の役割

川嶋 千寛

(国際経営学科4年)

---

## はじめに

私は5月31日から6月11日までの2週間、商業高校で教育実習を行った。2年生の情報処理科のクラスの担当だったが、実際に授業を行ったのは3年生の商業科のクラスだった。私は普通科高校出身の為、商業高校の雰囲気や仕組みなど全くわからず不安も大きかったが、学年に関わらず多くの授業を見学させて頂きながら沢山の生徒と接し、商業という

教科の魅力を改めて感じる事ができた。また、商業には全部で20個の科目があるが、同じ教科でも先生が違えば授業方法は異なり、同じ先生でも科目や対象クラスが違えば異なる指導をしていることがわかり、大変勉強になった。

## 実際に授業を行って

授業を行う際に一番心掛けたことは、生徒が理解しやすい例や資料を提示することだ。対象の生徒は3年生で商業に関する知識はついているものの、まだ高校生には理解が難しい言葉や内容も多い。その為、例え話を多く用いたり、生徒が関心を持っていることを基に授業を進めたりして、生徒が具体的にイメージできるように意識して教材研究を進めた。これは大学で模擬授業を行う際にも意識していたことだった為、スムーズに取り入れることができた。

実際の授業では、ICT機器を利用した。大学の模擬授業では、黒板に板書しながら授業を進める形式で行っていたが、実際の学校現場は電子黒板などのICT機器を使用したり、黒板と電子黒板を併用したりしながら授業を進める先生がほとんどだった。授業を展開していく上で自分の授業でも電子黒板やICT機器の利用が効果的だと感じたため、パソコン（パワーポイント）、iPad、板書の3つを使い分けながら授業を進めた。授業の大部分はパワーポイントで進めたが、スライドを移すと学んだ内容が見えなくなってしまうデメリットがあると指導教員に教わったので、本時の目標やまとめ、生徒に理解してほしい点や重要な点は黒板に書くようにした。iPadは生徒に具体例として動画や写真を見せる時に使用した。さらに生徒達も1人1台iPadを持っている為、作業の中で調べる時間を作り使用させた。設定時間通りに授業を進めることができなかつたことなど反省点は沢山あるが、既習事項と関連付けた課題を与えたり、時間を定めて作業を行うよう指示したりすることができた。集大成となる研究授業においては2週間の学びが活かされた授業になったと思う。また、生徒からのコメントにわかりやすかったと書かれていて嬉しかった。

## 教師として重要なこと

実習中沢山のことを学んだが、その中でも教師として重要なことについて特に印象に残った2つを挙げて記していく。

1つ目は、教師は常に生徒の1歩先を行かなければならないということだ。教科書を読んで板書をするだけなら教師が居なくてもできる。生徒に教科書や教材“を”教えるのではなく、教科書や教材“で”教えることによって考える力を育むことができるとわかった。また生徒に考えさせるには、教材を与えずに、既習事項との繋がりを考えながら生徒が立ち止まって考えるような教材を与えなければならないこともわかった。教師が生徒に対してできることは正解を導き出すために必要な知識を教えるだけで、その知識を使ってみて、失敗して、再度考え、答えにたどり着くまでを生徒にさせることで教師は生徒の先を行くことができると学んだ。

2つ目は、聞かせる時間と書かせたり考えさせたりする時間を区別しなければならないということだ。1つ目の中で記した教材を与えすぎないという部分にも繋がるが、生徒が自分で進められるような教材を与えてしまうと、生徒は作業に夢中になってしまい、教師が本当に伝えたいことや理解してほしいことが届かなくなってしまう。それを防ぐためには生徒の興味を引いたり間をとったりしながら効果的な発問をすることが大切であることがわかった。また、自分で考えたり周囲の人と意見を共有したりする時には、時間を正確に定め、間延びしたり盛り上がり過ぎたりしないようにすることも大切だと学んだ。

## 教師の役割とは

私はこの2週間を通して、生徒に興味を持たせて考えさせ、学びを深めさせることこそが教師の役割だと感じた。教科書に載っていることを覚えさせるのではなく、授業を通して生徒にもっと学びたい、もっと知りたいと思わせることが重要だと思った。また、各自の考えを自分の中だけに留めず、グループワークや授業の振り返りでアウトプットしていく

ことで思考が深まり、学習内容が定着していくのだと考えている。このような役割を果たすには生徒と同じように教師も日々勉強し、教材研究をし続けなければならないと改めて強く感じた。そうすることで、生徒の興味関心や疑問点に対して正確なアドバイスや助言をすることができると思う。教師も自分では考え付かないような生徒の新しい視点からの疑問や興味を知り、一緒に考えていくことで生徒と共に成長できるのではないだろうか。生徒と真剣に向き合うことは信頼関係を築くことにも繋がるだろう。

## おわりに

これから教育実習に行く皆さんは不安でいっぱいだと思う。実習先では失敗することもあるかもしれない。しかし、生徒の前では実習生も教師であることを忘れてはならない。生徒の見本となるような立ち振る舞いを心掛け、その中でも年齢が近いことを武器に生徒と沢山コミュニケーションをとっていくことを意識してほしい。

私は、生徒との距離が縮まれば縮まるほど、朝どんなに辛くても生徒の顔を見ると頑張ろうと力が湧いてくるようになった。元気を与えてくれる生徒達と関わることができる教師は、素敵な職業だと改めて思った2週間だった。そして何より忙しい中2週間という貴重な時間を費やして指導して下さった先生方に感謝し、学んだことを今後活かしていきたい。

## 教育実習で得たこと

久下 真帆

(食物栄養学科4年)

私は、令和3年6月14日(月)から18日(金)までの5日間、大分市内の小学校で栄養教諭の教育実習を行った。実習校には、栄養教諭は配置されておらず、授業についての具体的アドバイスは他校から指導に来てくださった栄養教諭の先生から受けた。給食業務に関しては、宗方小学校にいらっしゃる学校栄養職員の先生からご指導いただいた。

栄養教諭の業務は、大きく2つに分かれる。1つは食に関する指導、もう1つは学校給食の運営・経営管理である。ここでは、この2つの活動を通して身に付けた力について述べたい。

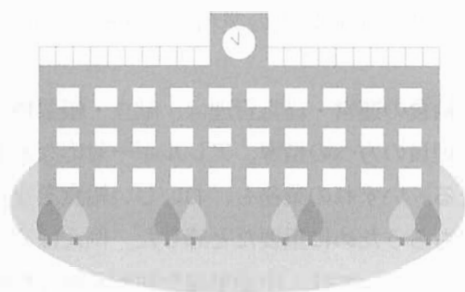
### 1. 食に関する指導

#### (1) 児童の実態を把握し、授業に生かす力

授業実習を通して、児童の実態を具体的に把握・分析し、その内容を授業に反映させる方法を身に付けることができた。

私は授業実習として5年生の3クラスで合計3回、カルシウムについての授業を行った。学習指導案は、教育実習開始前に作成し終えていた。その際、児童のカルシウム摂取状況は、全国的なデータから示される「学校給食がない日のカルシウム摂取量は、ある日に比べて低い。」という傾向を参考にしていた。

教育実習2日目に、授業実習をするクラスで「食べ物についてのアンケート」を行った。アンケートでたずねたのは、給食と給食以外での牛乳摂取状況、牛乳の好き嫌いとその理由、給食以外でのカルシウムを含む食品の摂取状況等である。アンケートの結果、ほとんどの児童が学校給食で出てくる牛乳を飲む一方で、学校以外では牛乳を飲まない児童がいることが分かった。さらに、牛乳を嫌いな児童は10%で、その理由には「味やにおいが嫌い」、「白い食べ物があまり好きではない」、「嫌いではないが



お腹が痛くなるから飲まない」といった意見がみられた。給食以外でのカルシウムを含む食品の摂取状況については、乳製品の摂取が多かったのに対して、小魚類の摂取量が少ない傾向がみられた。

このような実際の児童の傾向をふまえ、栄養教諭、学校栄養職員の先生にアドバイスを頂きながら指導案を修正した。具体的には、カルシウムを含む食品の摂取方法について考えさせる取り組みを付け加えた。1日に必要なカルシウム摂取量やカルシウムが含まれる食品について図を用いて説明し、その上で1日のカルシウム摂取量を満たす食べ物のパターンを考えさせ、発表させた。さらに、牛乳を飲むとお腹が痛くなる児童に対しては、少しずつ飲むといった方法や温めて飲むといった方法を授業中に紹介した。

アンケートを実施し児童の姿をとらえたことで、児童の実態に沿った授業づくりができた。授業を通して身に付けさせたい力が明確となり、それを軸に設定した「めあて」に沿った授業を展開することができた。

## (2) 臨機応変に対応する力

授業実習の回数を重ねるなかで、授業中臨機応変に対応する力を身に付けることができた。

月曜日から教育実習が始まり、水曜日に1回、木曜日に2回授業実習を行ったが、クラスや時間帯によって児童の様子は異なり、同じ授業をすることは1度もなかった。水曜日に行った最初の授業では、伝えることに必死で、児童の様子を把握することができなかった。木曜日に行った2回目の授業では、少し落ち着いて児童の発言を取り上げ、それに返答することができた。1人の児童に対して返答すると、他の児童も次々に発言し出して、授業が盛り上がったと感じた。同曜日に行った3回目の授業でも、2回目の授業同様に児童の発言に対して返答していたところ、授業時間が足りなくなってしまった。

研究授業を行った3回の授業経験では、授業時間が足りなくなり、最後のまとめが駆け足になってしまふなど、授業としてはまだまだなレベルだった。しかし、1回目の授業と3回目の授業を比べると、

児童の様子を確認し、発言を取り上げて生かす授業が行えるようになった。また、予想外の質問をされたとき、あいまいに答えるのではなく後で調べて教えるといった方法をとれるようになった。このような経験から、臨機応変に対応する力を身に付けることができたと感じている。

## (3) 児童に考えさせる授業を行う力

授業計画の段階で、児童の思考を引き出すことを意識した具体的な発問を設定する力を身に付けることができた。

1回目の授業実習後の反省会で、栄養教諭の先生から「考えさせる授業が良い授業」というアドバイスをいただいた。1回目の授業では、私が児童に対して一方的に説明する場面が多かったのだ。このアドバイスを受け、発問内容を見直した。1回目の授業では、1日に必要なカルシウム量を満たす食べ物のパターンについて、私が一方的に説明していた。しかし、児童に考えさせることを意識した発問を多く設定するように変更した。

また、1回の発問で答えが出なくても、児童から何らかの回答を引き出すようにヒントを与えるなどした。児童の理解をより深めるためには、教員による一方的な指導ではなく、教員と児童双方向のやり取りの中で児童自身が答えをみつけられるように導くことが大切だと学んだ。このような経験から、授業計画を考えた後、授業を受ける側の思考の流れを想像し、どういった発問が効果的か考え、授業計画に取り入れていく力を身に付けることができた。

## 2. 学校給食の運営・経営管理

今回、学校給食の運営・経営管理についても学ぶことができ、栄養教諭の業務のイメージが明確になった。

学校給食の運営・経営管理は、献立・帳票類の作成、調理員の方への指導、アレルギー対応など多岐にわたる。いずれの業務も、おいしい給食を安全に食べてもらうために重要だと感じた。例えばアレルギー対応については、中途半端な判断や発言が児童

の危険につながることを学び、学校給食は児童一人ひとりの命を預かっているという意識をもつことが大切だと学んだ。さらに給食調理の見学の際、学校栄養職員の先生が調理員の方に味付けについて具体的に指示を出している場面を見た。日ごろから伝えなければならないことは誰に対しても伝えることを意識していると聞き、栄養教諭として働く上で、意見をしっかりと相手に伝え、なおかつ相手との信頼関係を築くことが重要であることを学んだ。

栄養教諭として働く際には、分からないときや少しでも気になることがある時には、素直に同僚や関係する教職員に伝え、そのまま放置しないよう心掛けていきたい。そして、多くの現場経験を積み、将来は自信をもって自分の意見を伝えられる人になりたい。

### 3.教育実習を経験して

私は、教育実習の経験を通して、栄養教諭になる意思を固めた。大きなきっかけは、実習校の先生方と授業を中心とした児童との関わりにある。

実習校では、先生方に大変よくしていただいた。実習生が私一人だったこともあり、初日は孤独感を感じた。しかし、先生方の優しさに触れて、実習校の教員の一人として頑張ろうという気持ちになった。指導教員は、教育実習初日、緊張で腹痛を感じていた私に気づき、気遣ってくださった。さらに、多忙な業務の合間に私の授業準備を手伝ってくれた。授業実習には、指導教員の他、他の学年の先生など、多くの先生方が見に来てくださった。授業後には、児童の給食時間の様子等を報告してくださる先生もいた。

授業では、児童に私の伝えなかったことは伝えられたと手ごたえを感じた。授業後のアンケートには、「苦手な食べ物にカルシウムが入っているものが多いが、チャレンジしたい。」「家でもカルシウムをとるよう心がけたい。」といった感想が書かれており、児童に自分からカルシウムを含む食品を食べるようにする意欲を持ってもらえた実感した。授業以外でも児童が積極的に話しかけてくれたこ

とが嬉しかった。

教育実習前は進路について悩んでいたが、先生方の優しさや授業に対する手ごたえ、児童の素直な心に触れ、教員として学校現場で働く決心をした。

